ドキュメント

太平洋戦争

5 外地に骨を埋ずめて

青地 晨・解説

ドキュメント

太平洋戦争

5 外地に骨を埋ずめて

青地　晨・解説

青地　晨　評論家『叛逆者』
岡倉古志郎　大阪外語大教授『死の商人』
平井己之助　明治大学教授
千田　夏光　作家『禁じられた戦記』
赤木　由子　児童文学者『あの雲の下で』
北川　鉄夫　映画評論家『狭山事件の真実』

ドキュメント太平洋戦争⑤
外地に骨を埋ずめて

1975年8月25日　第1刷発行

解説　青地　晨
発行者　今田　保
印刷所　三　進

発行所　汐文社
千代田区外神田2—3—2
03—253—5970
京都市下京区七条河原町西南角
075—341—6278

刊行の辞

太平洋戦争は、おそらく日本歴史上最大事件であると言ってもよいのではあるまいか。社会のあり方を一変させた変化の大きさについていえば、無階級無政府、そして野生の動植物を食料としていた原始社会から、階級と支配権力とが発生し、農業耕作を主要生産とする社会への移行と、極東の列島にとじこもり前近代の封建社会の伝統の内に埋れていた日本から、世界の資本主義近代社会の潮流の中に身を投じた日本への変貌と、このきわめて遠い時期ときわめて近い時期とに生じた二つの社会構造の変化に比べるならば、太平洋戦争による日本の変化は、あるいはそれらよりもひとまわり小規模の変化というランクづけができるかもしれない。しかし、前の二つの社会的変革が、何ほどかの犠牲なしには進まなかったにしても、比較的にナチュラルな歴史の発展として完了し、価値判断を加えて言えば、大局的に大きな進歩として評価せられる歩みであったのとちがい、太平

洋戦争は、日本歴史上前後に例のない惨禍を伴なった悲劇であったという点で、他の歴史上の諸事件とはまったく比べることのできない凄絶きわまるできごとであった。

石器時代、少くとも縄文時代から数えて一万年にちかい年月を閲した日本人の歴史の中で、太平洋戦争という比類の無い大事件を体験するように運命づけられた私たち戦前戦中世代の日本人は、この大事件の生証人として、どの時代を生きた日本人よりも、かけがえのない貴重な体験を経ていると言うべきであろう。その体験は、「御一新」という明治維新を生きぬいて、封建社会から資本主義社会への推移を体験してきた私たちの祖父母や曾祖父母たちの世代の人々の体験と異なり、思い起しただけでさえ心暗くなる辛酸と悲憤と痛恨とにみちみちている。したがって、これだけかけがえのない体験を身につけながら、ことさらに口をとじて体験を語ろうとしない人々も多いという。

私は、その人々の気持を理解することができる。しかし、私たちがその体験を私たちの肉体とともに火葬場のカマドの中で煙と化せしめ、あるいは土葬の塚穴の中の土と化せしめてしまい、ついに体験者が一人も生き残っていない、戦後世代の人々だけの時代が到来するとしたならば、もはやその体験は文字としてまたは写真として、残された記録以外に何も無くなってしまうほかない。戦争が終ってまだ三十年にしかならない今日でさえ、社会の大半は戦争体験の無い世代で占められているのだ。余生が次第に短くなって行く私たちが、今のうちに一つでも多く戦争体験を客観化しておかなければ、手おくれになる時期が目前に迫っている。私たちの世代の何百万人かが戦火の中に散って行った。死者は語らない。手記や作品を残した死者も多いが、すべてをありのまま感ずるままに書きのこす自由の無かった時期に書かれた文章に、すべてがつくされているはずはない。同世

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

代の多くの同胞が戦火に斃れたなかに生き残った私たちには、生ある間に少しでも戦争の真実を次の世代に語り伝える義務があると思う。

以上は私一個人の所見であって、このシリーズの編集責任者でない私に、執筆者諸氏が私と同じような考え方で執筆に当られたかどうかを確めるすべはない。しかし、さまざまの多様な立場にあられるこれだけ多数の方々が、この企画の意義を認め進んでそれぞれの主題の執筆を快諾されたのは、たぶん私の平素考えている右のような所見と、同じでないまでもそれほど遠くない動機からではないかと想像し、汐文社から請われるままに、私がかってに忖度した本シリーズ刊行の意義を一筆した次第である。

一九七五年五月三日憲法記念日に

家永　三郎

目次

死の商人　岡倉古志郎……9

はじめに　10
「無敵の王者」　11
大金もうけのカラクリ　15
空飛ぶ「死の商人」　18
「私益」を追求する「財閥」　25
敗戦でもうける　29

外地での生活　平井己之助……37

中国へ　38
邯鄲　62
飢餓難民　67
清豊事件　73
イナゴの大群　81
塩を邯鄲へ　85

敗戦と日本人　90

従軍慰安婦という女たち　千田夏光……107
天皇の軍隊の管理売春　108
性欲処理用具　130
日本人慰安婦と朝鮮人慰安婦　145
軍需品にすぎない従軍慰安婦　163

従軍看護婦　吉光さきお……171
爆撃の野戦病院と病院船の撃沈　172
戦争がつくりだした日本の看護婦　179
待ちに待った召集令状がきた　183
めだたない薄化粧をして　185
乳のみ子をおいて征った諏訪とし　189

引きあげの長い道　赤木由子……195
四十二歳の召集令状　196
老人・女・子どもの街　鞍山　198

ソ連軍と脱走兵と八路軍 200
救国救民の八路軍 205
内乱のなかに身をおいて 208
厳寒と結核の兄をかかえて 214
遠く内地に思いをはせて 221
引き上げの第一歩 224
別れと出合い 232
朝鮮海峡 236
疑問となつかしさの祖国日本 237
敗戦から引き揚げまで 241
——中国東北（満州）での回想——
甘粕正彦の自殺 242
東北電影の成立 244
引き揚げの虚報 247
墓穴を掘る 249
革命記念日の遊行大会 255
コンスピラティーフ様 258

北川鉄夫……

ソ連映画人と　262
八路軍来る　266
一世一代の筆談　269
取り残されて　272
思わぬ潜行　274
妻病んで　277
胡蘆島の引き揚げ　280
解説　青地晨…284

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

死の商人

岡倉古志郎

はじめに

現代においては「死の商人」は独占資本そのものである。戦前、戦中の日本では、それはいわゆる財閥であった。

それでは、太平洋戦争中、財閥という名の「死の商人」は、はたしてどのようなことをやったのであろうか。

よく云われることだが、「満洲事変」や「太平洋戦争」は東條英機らの軍国主義者たちがひきおこし、そして指導したものであって、財閥もまた、勤労人民と同じように、いやいやながら戦争にひきこまれたのだというようないいわけが、とくに敗戦直後、財閥の代表者たちの口から発せられたものである。ほんとうにそうなのだろうか。財閥もまた、「戦争の犠牲者」だったのであろうか。

占領下の日本に駐在して、すぐれた記事を書いたアメリカのジャーナリスト、マーク・ゲインは、その名著『ニッポン日記』の一九四六年三月二八日づけの日記にこう書いている——

「財閥のお伽話の一つは、財閥と軍国主義者のあいだには超ゆべからざる深淵があったということである……だが、実際は、財閥と軍部はなんら根本的な確執をもたなかった。たとえ理由はちがうにせよ、財閥は軍部同様、心から侵略を愛していた……もしも両者のあいだに食いちがいがあったとしても、それはあくまで協力者のあいだの食いちがいにすぎなかった……財閥はいつ、どんなば

あいにも、侵略における軍の盟友以外のものではありえなかった……」

まさに、そのものズバリの名言である。

以下、太平洋戦争中の財閥、「死の商人」の姿を大まかだが、復元してみよう。

「無敵の王者」

日本の軍需工業は一九三〇年代後半に急速な発展を示した。軍需品の生産は予期以上に増大し、豊富なストックを勘定に入れれば、軍国主義者が新しい冒険に乗り出すのに、あえて尻ごみするほどのものはなかった。具体的にいえば、陸軍は四、八六〇機、海軍は二、一二〇機の航空機をもち、しかも一九四一年度の生産高は五、〇八八機に達していた。また、艦艇の完成トン数は、一九三一年の二二、五〇〇トンから一九四一年の二二五、一五九トンと約一〇倍にはねあがり、この一〇年間の完成総トン数は合計七〇一、二九九トンに達していた。一方、戦車そのほかの装甲車輌の生産は、一九三一年のわずか一二輌から一九四一年の二、四六六輌に、自動車のそれは一九三〇年の五〇〇輌から一九四一年の四七、九〇一輌にとそれぞれ激増していた。一九四一年における弾薬の貯蔵高は、一九四一年の生産高を基準として五年分に及んでおり、武器のストックは陸軍省の統計によると九五個師団をまかなうに足りたばかりでなく、一九四一年度の生産は一五個師団の装備量に匹敵していた。これだけの生産と装備とがあれば、何も恐れるものはない——これが軍国主義

者たちの計算であった。

以上のような数字は、「満洲事変」から太平洋戦争にかけて急速に発展した日本の軍需工業の一面を現わすもので、それ自体、日本の「死の商人」の肥り方を示すものである。「財閥はあらゆるやりかたで侵略を利用して金をもうけた。最近の一五年間に、かれらは兵器製造で何十億ドルという金をもうけた……財閥の銀行は政府に金を貸しつけた、日本の陸軍がアジアの地図の上に、さらにもう一歩の前進を開始したとき、政府は時を移さず《開発》会社をつくったが、これには財閥がとてつもない巨額の投資をした、《開発》会社は侵略地域の組織的掠奪に没頭した（『ニッポン日記』）」とマーク・ゲインも書いている。

「満洲事変」から太平洋戦争にかけての数年間、日本の戦時経済は飛躍的に拡充されたが、同時に、戦時経済における支配的地位は「死の商人」によって占められ、「死の商人」は戦時経済機構をその手中に収めて行ったのである。「死の商人」による生産の集積、資本の集中、戦時経済機構における独占的地位の確立は、この時期に完成される。そして、それは、国内の労働者、農民、中小企業者の犠牲において、また数百万人の兵士の血の値において、さらに、中国大陸や東南アジア諸地域の人民の生命、財産の劫掠、資源の収奪を対価として行われたのであった。

たとえば、すでに太平洋戦争前、日本が中国の華北を侵略し、ここにかいらい政権をつくったとき、その財政は「特殊貿易」と称するアヘンの密貿易でまかなわれたが、それにタッチしたのは三井物産や三菱商事で、その取りもちは陸・海軍や興亜院がやった。東京裁判の判決文によると、三

井、三菱のアヘン密輸船は、何と軍艦旗をかかげた「帝国海軍」の砲艦によって護衛されるという念の入り方だった。

それはともかくとして、満洲事変から一九四五年（昭和二〇年）の敗戦に至るまでのあいだに、日本の産業構成は重大な変化をとげた。軽工業が支配的で生産の集中が相対的に低かった日本は、この期間のあいだに、高度の経済的集中と統制のもとにおかれた重工業国に転化した。日本の繊維工業が全工業生産高の中で占める比重は、一九三一年（昭和六年）の四〇％から一九三九年（昭和十四年）の二〇％に激減した。また、化学工業の生産高は、一九四二年（昭年一七年）には、全工業生産高の二〇％に達した。軍需工業の拡充は、一九四三――四五年（昭和十八――二〇年）のあいだにピークに達し、この間軍需生産高も圧倒的に増大した。敗戦当時には、重工業生産高の全工業生産高にたいする比重は、五分の四以上に及んでいたといわれている。ところで、この軍需生産の拡充と産業構成の高度化の推進力は何であったか。それは、いうまでもなく、三井、三菱、住友、安田の四大財閥を中心とする「死の商人」である。

すでに、財閥は、太平洋戦争以前においてさえ、日本経済の中で強力な地歩を占めていた。これらの四大財閥（三井、三菱、住友、安田）は、太平洋戦争で尨大な戦時利潤を取得する以前においてさえ、すでに日本の全株式資本の六〇％を支配していた。三井財閥だけでも同じく二五％を占めていた。一方、四大財閥は、渋沢、川崎などの銀行資本家とともに、銀行、信託、保険会社に預け入れられた資金総額の五七％を保有していた。

また、三井、三菱、住友の三大財閥だけでも、銅・石炭生産高のすくなくとも五〇%、全商品ストックの五〇%、商船総トン数の五〇%、外国貿易総額の三三%を支配していた。

また、三井と三菱だけで、造船業の五〇%以上、製紙業の一〇〇%、製粉の七〇%、製糖の一〇〇%、化学工業の大部分を支配していた。三菱は、航空機と板ガラス生産の支配をにぎっていた。そのうえ、これらの大財閥は、銑鉄、鋼鉄および冶金にかんしても、政府とその支配権を分有していた。

では、太平洋戦争を間にはさんで、財閥中心の資本の集中は、どれほど進行したであろうか。軍需インフレ時代（一九三〇——一九三七年）には、あらゆる規模の会社数が著しく増大したが、この場合、資本増大の大部分は一〇〇万円以上の資本金をもつ大会社であった。太平洋戦争中（一九四一——四五年）には、中小企業は激減し、総資本額中におけるそれらの割合はひじょうに低下した。これは逆にいえば、資本がものすごく集中されたことを意味している。このさい、資本総額一千万円以上の大会社の割合が一九三七年の五七%から一九四五年の七〇%に増大したことはその何よりの証拠であろう。

「もしも財閥が太平洋戦争直前までに、日本の産業や金融の主要な部門を支配していたとするならば、財閥は、戦争末期までには、戦時中大規模に拡充された日本経済の全体にたいする無敵の王者となった、ということができる（ジェイムズ・アレン『世界の独占体と平和』）」アメリカのマルクス主義経済学者ジェイムズ・アレンは太平洋戦争を契機とする財閥の支配力のいちじるしい強化につい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c